知と文化の拠点としての図書館再生～石川県立図書館の整備～

取組のあらまし

取組団体　石川県

取組内容　石川県立図書館は、老朽化した施設を刷新し、「文化立県・石川」の拠点として再整備された。新館は「百万石ビブリオバウム」の愛称のもと、文化活動と交流の場を備え、体験型スペースやテーマ別本棚など多機能な空間を提供している。県民の知的好奇心に応える先進的な図書館である。

推進体制　34 名（令和６年度）

予算等　1,017,824 千円（令和６年度）

1　石川県の概要

人口	1,098,121 人	令和７年１月１日現在（住民基本台帳人口）
職員数	3,275 人	令和６年４月１日現在（一般行政部門）
総面積	4,190.94 ㎢	令和７年 10 月１日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表 1　石川県の位置図

出所：石川県ホームページ

2　取組の背景・目的

(1) 図書館リニューアルの背景と目的

石川県立図書館は、明治 45 年に兼六園内に開館して以来、100 年以上にわたって県民の読書活動や市町村図書館の振興に貢献してきた。しかしながら、昭和 41 年に開館した本多町の旧館は、施設の老朽化と耐震性の不備に加え、閲覧スペースの狭さや書庫の分散配置、さらには駐車場の不足といった課題を抱えていた。こうした物理的制約は、利用者サービスの向上を妨げ、現代の多様化・高度化した県民ニーズに応えるうえで重大な障害となっていた。

このため、石川県は平成 28 年に策定した長期構想において、図書館の機能強化を図るべく、十分な敷地面積が確保可能で、アクセス性にも優れた金沢大学工学部跡地への移転・建替えを明記した。そして平成 29 年に「新石川県立図書館基本構想」を策定し、知と文化の象徴としての新たな図書館像の具現化を目指した。

(2) 再整備の基本構想と方針

基本構想では、「県民の多様な文化活動・文化交流の場として、県民に開かれた『文化立県・石川』の新たな“知の殿堂”」をコンセプトに据えた。図書の貸出・閲覧機能にとどまらず、公文書館機能や生涯学習機能の統合、石川の多彩な伝統文化を活かすコレクションの活用を通じて、知的活動と文化的交流が自然に交差する場を目指したのである。

また、県民の書斎・居間・交流の場となる「行きたくなる図書館」、生涯学習やビジネス支援など多様な課題解決機能を持つ「頼りになる図書館」としての役割も意識され、ICT を活用したハイブリッドライブラリーの構築、高水準の情報基盤、人材とネットワークの充実も重視された。

(3) 設計・建設に至るまでのプロセス

また、新石川県立図書館の基本構想の策定段階では、学識者や建築の専門家、県民の声を反映させるため、「基本構想検討委員会」が設置された。計４回の会議において、多様な世代・立場からの意見を反映し、図書館像や機能の方向性が具体化された。これにより、従来の図書館像を一新する“アクティブな知の場”が構築されたのである。

図表　2　新石川県立図書館の基本構想の全体像

出所：石川県『新石川県立図書館基本構想（平成 29 年３月）』

3　取組内容

新石川県立図書館（愛称：百万石ビブリオバウム）は、「思いもよらない本との出会いや体験によって、自分の人生の一ページをめくることができる場所」という基本理念のもとに設計されており、館内には多様な利用者の関心に応える空間が構成されている。この愛称には、「百万石」に象徴される加賀藩の豊かな文化と歴史、そして「ビブリオ（＝書物）」と「バウム（＝木・層）」を組み合わせた造語としての意味が込められており、本が枝葉のように広がり、知識が幹を成す「知の樹」として、県民の知的好奇心を豊かに育む場であることを表している。図書館を「本の森」に見立てるこの名称は、公募と選考によって決定されたものであり、新図書館の理念や空間コンセプトを象徴的に表現している。

開架図書は約 30 万冊、収蔵能力は 200 万冊、閲覧席は 500 席以上、駐車場は 400 台分と、ハード面においては都道府県立図書館として全国有数の規模を誇る施設となった。

館内の最も特徴的な取組の一つは、利用者の生活テーマや関心領域に沿って構成されたテーマ別本棚の導入である。「子どもを育てる」「仕事を考える」「暮らしを広げる」「自分を表現する」「世界に飛び出す」など、計 12 のテーマに分類された本棚が館内各所に設置されており、利用者は自分の関心や日々の感情に応じて自然と本と出会える仕掛けが施されている。これにより、従来の分類体系にとらわれず、本との偶然の出会いを楽しむという新しい図書館体験が提供されている。

さらに、従来の閲覧・貸出機能にとどまらない多彩な施設機能も併設されている。たとえば、館内には「モノづくり体験スペース」や「食文化体験スペース」が設けられており、書籍で得た知識を実際に手や身体で体験することが可能となっている。こうした体験を通じて、読書が行動につながり、学びが深化する構造を意図している。

また、「だんだん広場」といった開放的な空間は、読書会や講演、子ども向けイベントなどに柔軟に活用されており、図書館が単なる静寂な空間ではなく、地域住民の交流や創造の拠点として機能していることを体現している。図書館職員もまた、単なるカウンター業務にとどまらず、来館者の関心や相談内容に応じて関連資料を提示したり、他の施設やイベントとのつながりを提案したりするなど、まさに「知の触媒」としての役割を果たしている。

ICT 面でも、新図書館は県内外の他館と連携した横断検索システムや、レファレンスデータベースの整備などが進められており、図書館に足を運ばずとも情報にアクセスできる仕組みが整えられている。特に、市町立図書館と連携した資料提供や、専門職によるレファレンス支援の仕組みは、県全体の図書館ネットワークの中核としての役割を明確にしている。

図表 3　施設の一例

出所：石川県立図書館ホームページ

4　成果・課題

（1）本取組の成果

新石川県立図書館は、開館以来、地域住民をはじめ観光客や研究者、高校生・大学生、子育て世帯など幅広い層に利用されており、従来の図書館像を超えた施設として高い評価を受けている。特に、テーマ別本棚をはじめとした来館者視点に立った空間構成は、図書館が生活に寄り添う存在であるという印象を強く与えており、利用者数や滞在時間の増加につながっている。体験型スペースやイベント広場も、文化活動の場として定着しつつあり、多様な活動主体が図書館という場を媒介にして交流を深めている様子が確認されている。

また、行政機関や教育機関、文化団体との連携も進み、図書館が単独の施設ではなく、地域全体の文化・教育資源としてのネットワークに組み込まれることで、その存在価値が一層強固なものとなりつつある。

（2）今後の課題

開館以来、多くの利用者を引き付けている図書館であるが、今後も引き続き、魅力ある企画や展示を継続的に実施するとともに、さらに、行政機関、大学、NPO 団体、民間団体など様々な組織と連携を深め、住民の様々な課題解決にも対応した企画・展示など幅広い展開が求められる。

図書館独自の総合検索システム、最新のシステム、新たなデータベースなど様々なシステムが導入されているが、高齢者など、ＩＣＴに慣れない方々へも利用が広まるよう、わかりやすい案内や広報の充実が必要である。

関連・参考資料

石川県立図書館ホームページ
https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/
石川県『新石川県立図書館基本構想（平成 29 年３月）』
https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/3260.pdf
石川県『石川県立図書館サービス計画（令和４年７月）』
https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/3732.pdf